

立命館大学映画研究会

シネマミサイル抜粋版

2008年～2010年

田鹿良太執筆分

2010年

会員のオススメ映画『キッズ・リターン』
悪役がかっこいい映画『シティ・オブ・ゴッド』
アカデミー賞『ラスト・エンペラー』

2009年

戦い『旅立ちの時』
夜『銀河鉄道の夜』
『夜のピクニック』

2008年

『ユー・ガット・メール』

「会員のオススメ映画」 キッズ・リターン

3回生 多鹿

～あらすじ～

1996年に公開された日本映画。巨匠、北野武監督の映画である。高校生のシンジ（安藤政信）とマサル（金子賢）は、毎日、街や学校をふらふらしては、うだつのあがらない生活をしているごろつきであった。ある時、ひよんなことからシンジとマサルはボクシングを始めることになり・・・。



～感想～

今回のテーマ範囲の広さにどれにしようか迷いました。正直、オススメの映画はいくらでもありそうなので……。そこで、過去の自分のシネミサを見ていると、邦画が少ないことに気づき、邦画のオススメ映画にしました。

さて、この映画、そうです！あの北野武監督の映画なのです。北野監督と言えば、バイオレンスなやくざ映画などを想像する人がいるかもしれませんが、この映画、全くコンセプトは違います。ジャンルで言うと、青春映画になると思います。監督の不慮のバイク事故からの復帰第一作目がこの映画に当たります。

ここから、映画の内容に触れていきたいと思います。この映画、ジャンルは青春映画と言いましたが、正直、他の青春映画とは一味違います。うだつの上がない高校生が主人公と言う設定は、よくあります。しかし、他の青春映画は、なんだかんだ問題があって、最後は「成功」する（例えば、恋が実る、部活の試合に勝つなど……）といったものが多いのに対し、この映画は、その「成功」が物語の中盤に来ています。つまり、本来、物語のラストに来てもいいような「成功」が、主人公の二人はいきなり中盤あたりで、「成功」の絶頂期をむかえてしまうのです。よくある映画ならば、ここで終わりなのですが、この映画はその先を観ることが出来ます。

その先にあるもの……だいたい想像出来るんじゃないでしょうか？そうです、「挫折」が待っています。詳しく書くとネタバレになってしまいますので、書きませんが、主人公のシンジとマサルは、一度はその「成功」を手にしたように見えます。しかし、二人のちょっとした心のゆるみが、大きな挫折へと導いてしまうのです。よくある映画ならば、「挫折」があって、「成功」へと繋がるものが多いのに対して、この映画は、「成功」の先に、「挫折」があるのです。監督は、なぜ、こういった物語の構成にしたのか？その答えとして、映画のラストに、全てが集約されています。そのラストは、是非自分の目で観てください。

そこには、不慮のバイク事故によって、一時危篤状態になり、もう芸能界には戻って来られない、とまで言われた北野武監督自身に投げかけるメッセージが込められています。そうです、この映画を監督した北野武監督が、自分自身に充てた映画なのです。そう考え

ると、主人公の二人も監督自身を投影したのかもしれませんが。

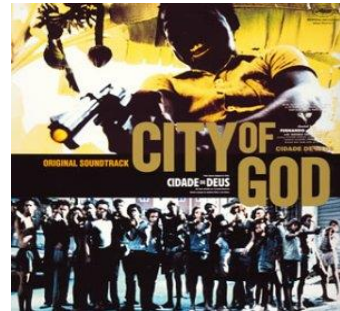
北野監督の映画をご覧になった方は、分かると思います。オススメの映画と題しましたが、必ずしも万人受けするような映画ではないです。正直、つまらない人には、つまらない映画だと思います。しかし、あえてこの映画をオススメの映画にしました。なぜなら、この映画にこめられたメッセージが、他の青春映画に比べて比重が重く、さらには、映画としてとても完成度が高いと思ったからです。さらに、この映画の主人公達に、誰しもが少なからず共感できる部分があるような気がしたからです。だまされたと思って、是非、一度ご覧になってみてはどうでしょうか？何か新たな発見があるかもしれないです。

「悪役がカッコいい映画」 シティ・オブ・ゴッド

3回生 多鹿

～あらすじ～

2002年のブラジル映画。ブラジルは、リオ・デ・ジャネイロ郊外にあるスラムを巡っての話を、主に主人公のブスカペの視線から描く映画。主人公を取り巻く野郎（ギャング）たちの人生を少年時代から、青年時代までを一気に観せる。



～感想～

スラムに生きるギャングたちの映画です。監督は、「ブラインドネス」などで知られるフェルナンド・メイレスです。この映画、正直な話、主人公のブスカペ以外の登場人物は、ほとんどが悪役と言っても良いでしょう。ですから・・・びっくりするぐらいの暴力描写のオンパレードです。「スラムドック・ミリオネア」をさらに3倍ぐらいえげつなくしたような映画です。暴力・金・ドラッグ・強盗・女などなどなんでもありです。

さて、そのギャングたちの中に後にスラムのボスになる、リトル・ゼ（少年時代に自らリトル・ダイスから改名）という人物が出てきます。多くのギャングが出てきますが、彼は突出しています。彼は、悪役らしく少年期から早速、むごいことをやらかします。特に、少年ギャングたちがお金を目当てに、モーテルを襲撃するシーンは酷いものです。襲撃を終えた後、彼がやってきて、持っていた銃でそのモーテルにいた従業員、お客（10人ぐらい）を皆殺しにしまいます。たった、10歳ぐらいの少年が銃を片手に、何の恨みもない人々を皆殺しにする。まず、人間のやることではありません。少年期から、まぎれもなく悪役だと思わせるような行動の片鱗が出たワンシーンでした。

さらに、青年期になり、彼の悪役っぷりは加速していきます。多くの悪事をやりますが、ネタバレになるので割愛します。しかしどれもこれも、人間のやるようなこととは思えません。気になる人は、実際に観て下さい。

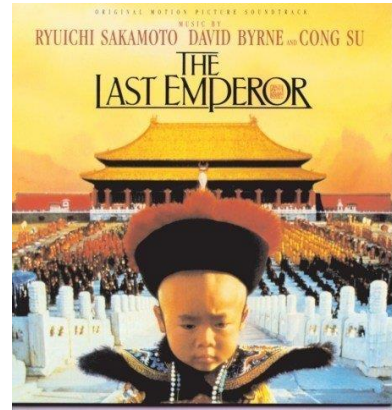
これまで見てきたように、彼は極悪非道という言葉がぴったりとはまります。このリトル・ゼ、何がかっこいいのかというと、とことん悪役に徹しているところです。ファンタジーやアクションなどでは、こういったキャラはさほど珍しくもありませんが、社会問題を扱った映画で、これほどまでに悪役になりきることが出来る彼は、やっぱりかっこいいです。さらに、凄いのがこの映画、なんと実話を基にした映画だということです。つまり、リトル・ゼにあたる人物が実際に存在したということです。もちろんのことですが、彼が行った行為は、どこからどこまでが事実のことかは分かりません。でも、この極悪非道の人物の元になった人物がいるとは・・・ただただ茫然です。ここまできると、一周回ってかっこよく見えてしまいます。まさに、悪役の中の悪役。ですが、別に憧憬の念はありません。あくまでも、傍観者から見たら、かっこいいと思うだけです。なので、こういった人物には、決してなりたくはないですね。

「アカデミー賞」 ラスト・エンペラー

3回生 多鹿

～あらすじと映画の概要～

清朝最後の皇帝、愛新覚羅 溥儀（あいしんかくら ふぎ）の波乱万丈の半生を、溥儀自身の著書「わが半生」を元に描く、歴史超大作！



1987年のイタリア、中国、イギリスの合作映画。監督は、巨匠ベルナルド・ベルトリッチ。この映画は、第60回アカデミー賞：監督賞、作品賞、撮影賞、脚色賞、編集賞、録音賞、衣装デザイン賞、美術賞、作曲賞と9部門を獲得し、さらに、第45回ゴールデングローブ賞のドラマ部門作品賞も獲得した、まさに怪物映画である。特に日本では、日本の音楽家、坂本龍一がこの映画で手がけた曲（実際には坂本龍一含め、3人による合作）が作曲賞を受賞し、日本人で初めて受賞したことで大変話題になった。

～感想～

この映画、とにかく圧巻のスケールです。正直、溥儀の歴史的背景を知らなければ、ほとんど理解できない構成になっています（なので、ご覧になられる方は、鑑賞する前に溥儀のことについてちょっとだけ情報を入れておいたほうが良いと思います。）が、たとえそうであっても、その映像美、音楽に酔いしれることができます。

映像美で特筆すべき点が、あの有名な溥儀の即位式のシーンです。溥儀はわずか3歳ぐらいで、清朝最後の皇帝（宣統帝）になりますが、その即位式を再現したのがこのシーンです。このシーンは、実際の歴代の皇帝が暮らしていた紫禁城で撮影され（紫禁城の撮影許可が出たのはこの映画が最初で最後です。）、エキストラ千人以上が参加し、その1人1人に細部までこだわった衣装を着させ、壮大なロケが行われました。とにかく色彩が鮮やかで、荘厳な雰囲気観客にも十分に伝わってきます。わずか、3歳ぐらいの幼児に千人を超える人々がひざまずくシーンは忘れられず、脳裏に焼きつくという言葉がしっくりくるぐらいです。

次に、音楽です。先ほども述べた通り、坂本龍一が作曲を担当しています。映画の節々で音楽が流れますが、それがまた美しいメロディなんです……。この美しさを表現するには文章では限界があるのでこれ以上は述べません。1度聞いてもらったほうが手っ取り早いと思います。映画の中で、音楽が占めるウェイトは低いというより、あまり注目せず、鑑賞している方が多いと思います。しかし、この映画を見るとその考えがガラッと変わるはず。音楽があつての映画、音楽と映画がこれほどまでに連動していることを気づかせてくれます。

あと、ストーリーに関しても、特筆すべき点がいっぱいありますが、ネタバレになって

しまうので、一言だけ言いたいと思います。この映画、まさに栄枯盛衰です。人間の人生ってはないものなんですね・・・。

以上のように、映像表現、音楽、ストーリーどれを取ってもあまり文句のつけようがありません。160分越えて、物語は淡々と進みます。なのに、その長さを感じさせない構成になっています。それは、ひとえに、この映画が映画というエンターテインメントの理想系だからではないでしょうか？もちろんのことながら、これだけのスケールの映画を描こうと思うと莫大な制作費が掛かってきます。正直な話、こういった莫大な制作費が掛かる超大作には、随所に無駄な制作費の使い方をしていることが多いです。例えば、CGの乱用であったり、話題を呼ぶために有名な俳優を多数起用したり、映像にこだわりすぎて内容が希薄になってしまったり・・・。挙げればきりがありません。

しかし、この映画には見当たらないのです。その、圧倒的なスケール感を出すための演出としての制作費のかけ方に無駄がありません。膨大なエキストラによって、かもし出される華やかさ。豪華絢爛な衣装や、紫禁城などの歴史的遺産での撮影によって出される映像美。坂本龍一の音楽。荘厳なストーリー展開。1つでも欠けたら台無しになっていたに違いがありません。これらすべてが1つになって、初めて「ラスト・エンペラー」というエンターテインメントは完成したといっても過言ではないです。



「戦い」 旅立ちの時

2回生 多鹿

～あらすじ～

アメリカで、一見平穏に見えるごくありふれた4人家族。しかし、その家族の両親が実は犯罪者で、いつも警察から逃げていた。警察から逃れるたびに、偽名を使い、引っ越しを余儀なくされた。当然、息子である主人公の17歳のダニーと弟も両親と共に警察から逃れる毎日。全ては、家族の結束を守るため。そんな折、ダニーが新たな引っ越し先で、好きな女性ができ、ピアノという生きがいを見つけるが・・・。

～感想～

1988年のアメリカ映画です。監督は、「12人の怒れる男」などで知られる、名監督のシドニー・ルメットで、主人公のダニー役をこれまた名優リヴァー・フェニックスが演じています。

あらすじで紹介した通り、ダニーは自分の好きなものに出会います。その過程で、「好きなことをしたい。」「好きな人と一緒にいたい。」と誰しもが思う当たり前のことを望みます。しかし、ダニーだけがこの場所に残ってしまうと、いずれ身元が警察に見つかってしまい、もう逃げ惑う家族とは二度と会えなくなる。それに加え、父親は居残ることに大反対している。このいわば究極とも言えるジレンマにダニーは大きく悩まされることとなります。自身の心の本音と、家族における自分の立場・・・本音を取るか、立場を取るか。これら、両極の考えにおけるダニーの心の葛藤を映画では、終始描いています。そう、心の「戦い」を、ひたすら真っ直ぐに描いているのです。そのため、演出や、演技が少々ベタかも知れませんが、しかし、そんなのは全く苦にはならないです。

もちろんのことながら、映画の最後で、この心の葛藤に決断を下します。しかし、この決断は、本人の力だけで決断したわけではありません。家族の力があってこそ決断できたのです。僕も含め誰しもが、こういった大きな岐路に立たされる時期が来ると思います。その岐路は、もう来た人もいるかもしれません。これからの人もいるかもしれません。いつやってくるかなんて分かりません。選んだ道が正しかったのかも分かりません。ただ、この映画を見て、一つ理解できたことは、こういった人生の岐路は決して一人では決められないこと。周りの人々の助言によって初めて決断できるということ。自分が一人だけで生きていない、また、生きていけないことを痛感できた映画でした。

蛇足・・・本当にいい映画です。決して映画史に残る傑作とは言えないです。また、巨額の制作費を掛け、観客を圧倒させる超大作でもないです。だけど、映画というものをもっと好きになれます。「映画が好きでよかった。」見た後、そう思うことのできる映画です。

「夜」 銀河鉄道の夜

2回生 多鹿



～あらすじ～

小さな漁村で暮らしていた主人公の1人、いじめられっこのジョバンニは、ある夜、野原で夜空を眺めていたら眩しい光に目が奪われる。気がつくやうに銀河を颯爽と駆け抜ける銀河鉄道の車内にいた。その鉄道にはもう1人の主人公で、ジョバンニの親友のカムパネルラもなぜか乗車していた。2人はその銀河鉄道に乗り銀河の旅をすることに……。

～感想～

皆さんは、宮沢賢治の小説で知っていると思いますが、実はこの小説には映画版があったのです。上映されたのは結構前の話で、1985年になります。実写ではなく、アニメで銀河鉄道の夜の世界が描かれています。というかこの世界観を実写で描けるはずもないのですが……。主人公の1人のジョバンニの声優さんはなんと、ドラゴンボールのクリリンや、ワンピースのルフィ役で知られる田中真弓さんが演じています。なんとも豪華なキャストです。

さて、この映画はほぼ原作に忠実に描かれているのですが、この世界に登場する人物が、人間ではなく、猫が人間になったような猫人間で描かれていて、非常にかわいらしいです。そのかわいらしい絵とは裏腹とっては言い過ぎですが、シリアスで、幻想的な世界観で描かれています。舞台は小さな漁村で、夜と題名に付くだけあって、ほとんどが夜のシーンで構成されています。

途中で、様々な駅で降りたり、様々な人々と出会います。例えば、白鳥ステーションという駅では、古代の動物の発掘している現場を見たり、永遠と続く階段を降りていくと、そこには誰もいない自分たちの住んでいた村があったり、沈没した船の乗客だったらしい子供たち（この子供たちは人間の容姿をしています）に出会ったり色々です。なぜ、銀河を駆け抜けているのにこういった場面に遭遇するのか？そのような疑問が生まれる場面、場面こそが幻想的な世界観をより引き立たしていると言っても過言ではありません。

上記の場面もそうなのですが、この映画すべてが非常に幻想的で、そしてどこかはかなく描かれています。そのはかなさは、どこから来ているのかと言うと、すべてラストのシーンに集約されています。ネタバレになってしまいますのでここでは割愛しますが、そのはかなさに思わずキュンと胸が縮んでしまいました。「たかだか、銀河鉄道の夜の映画版だろ」と思って軽視しないでください。見てしまうとその幻想的で、なんとも言えないはかなさがある世界観にどっぷりと浸かっているはずですよ。

夜のピクニック

2回生 多鹿良太

～ストーリー～

2006年公開の高校時代を描いた日本の映画です。舞台となる高校では、毎年5、6月ぐらい(すみません 忘れました)になると80キロの道のりを全校生徒で夜通し歩き続けるというわけのわからない行事があり、映画の最初から最後までこの歩行大会が占めています。だから・・・ただひたすら歩いたり、走ったりしているシーンばかりです。

この映画の主人公となる高三の甲田貴子は同じ高三の西脇融(とおる)に、高校三年間、ずっと胸に秘めていた、ある思い(恋心ではないです)を言うためにこの歩行大会に挑みます。果たしてその密かな思いとは、またその思いの行方は・・・。

～感想～

この映画の歩行大会によく似た、マラソン大会や、運動会といった学校における行事は全校生徒みんなが寄り集まって1日中、そのことに夢中になってするものでした。皆さんたいがい行事が始まるまで「嫌だ」「めんどくさい」などとぼやきながらもいざ始まってみると意外と楽しく、終わった後は、終わったという達成感や、終わってしまったという少し悲しい気分になったりしたんじゃないでしょうか？ この無駄とも思える集団行動はもはや二度と経験できないものだと思います。

この無駄な集団行動こそが小・中・高校生の醍醐味であり、1番印象に残っていることだと思います。この映画には、その醍醐味が描かれています。一見ただ走ったり、歩いたりしている単調な映画なのですが、見終わった後、非常にノスタルジックな気分になります。つまり、内容が良いだの悪いだのより「高校時代に戻りてえ～」と思ってしまう作品です。この映画を見ていると、あのときの爽やかな気持ち、もどかしい気持ちがふつふつと蘇ってきます。あのしんどいだけと思っていた行事が実は、もう二度と経験できないことであり、楽しくて、特別なことであり、印象に残っていることだと気づかさせてくれる映画です。

最後にもう一回言いますが・・・とにかく高校時代に戻りたくなります。

ユー・ガット・メール

1回生 多鹿良太

この映画は、トム・ハンクスとメグ・ライアンが出演しています。10年ぐらい前の映画ですが、ラブコメの王道をいっています。それゆえに、とても見やすく、裏切らない安心感があります。

～ストーリー～

メグ・ライアンとトム・ハンクス（役の名前を忘れました）は仕事上でのライバル同士で、会うたび対立をしています。しかし、パソコンのメール上でお互い素性を隠して、メールのやり取りをしています。素性を隠しているため、お互いの相手が仕事のライバルだということを知りません。メール上で悩みや、愚痴を言い合っているうちにお互いにメールの相手に引かれていくが・・・というお話です。

～感想～

まさに王道です。内容が非常にわかりやすいので、映画に集中しなくてよく、気軽に見れます。ラストも視聴者を裏切らないベタベタのハッピーエンドでよかったです。また、メグ・ライアン、トム・ハンクス共に好演をしていて、感情移入もしやすいです（どちらもかなり若いです）。個人的に、メグ・ライアンがスーパーモデルみたいな女優ではなく、一般の人の中にいそうな可愛らしい雰囲気がとても良かったです（ほんとに綺麗で可愛いです）。なにかとギスギスした世の中、難しい映画ばかり見ないで、たまには単純明快な、ほのぼのとしたこのような映画もいいんじゃないでしょうか？心が落ちつくと思いますよ。なにとはともあれ、この映画はラブコメディの王道を突っ走っていて、「ベタっていいなあ」と思わせる映画でした。